

“好きなこと”で  
見えた未来の可能性

## そして一箱古本市はつづく



気づかせてくれる頼もしく優しい存在です。

### 5年目という節目

多くの県内外にもファンを増やし、年々、大きくなっていったブックイベントも5年目という節目でファイナルの決断をくだします。その決断について、事務局だった荒澤久美さんはBBOの冊子、『ndanda2』でこう語っています。

「本来『本』は生活の中にあり、特別なものではない。イベントは非日常。だから、イベントを日常に戻す。潔く、美しく、未来の可能性を感じさせつつ。」

その言葉通り、2018年のファイナルはこれまでの集大成と言うにふさわしく潔く美しい、活気に満ちた最終回となりました。

みんなが笑顔で、みんなが楽しく、みんなが幸せそうでした。

### 未来の可能性

そして2019年。「未来の可能性」

る企画を行ってきました。

### 本を書く人、つくる人、つなげる人…

BBOでは「本」に関わっているプロの方々をお招きして、本の舞台裏を語っていただくトークイベントも開催してきました。

これらのイベントで培われた「縁」は大きく、装丁家の桂川潤さんやライターで編集者の南陀楼綾繁さんは一箱出店者としても毎年参加され、BBOとの関わりを続けています。実行委員の間でお二人は、自分たちでは気づけない地元の良いところを外の視点から

### 川西町フレンドリープラザで

### 一箱古本市が開催されたのは 2014年6月のこと。

Book! Book! Okitama (以下BBO) のメインイベントとして始まりました。

### 置賜初のブックイベント

BBOは「本と出会い、人・店・まちがつながる」ことをコンセプトに、山形県の置賜地域で開催されてきたブックイベントです。置賜の大好きなちが実行委員となり、川西町フレンドリープラザを中心に米沢市など3市5町の30カ所の店や施設で「本」に関する

はすぐにプラザで芽吹きます。

このまま全部がなくなってしまうのはさみしい、一箱古本市だけでも残せないかなど、さまざまな声がよせられる中、9月22日の日曜日、「一箱古本市in川西」がフレンドリープラザ主催として開催されました。そこには、5年間BBOを見守ってきたプラザの想いがありました。

一箱古本市がもたらしたものは、「好きなこと」を通して生まれる交流とその大きさです。本を通して、人と人、そして町がつながる交流の場として、これからも一箱古本市は、ここ川西町でつづいていきます。

“本好き”の人たちが自然と集まり、成し遂げたBook! Book! Okitamaの志は、形を変えてつなげていきます。

(仁科)

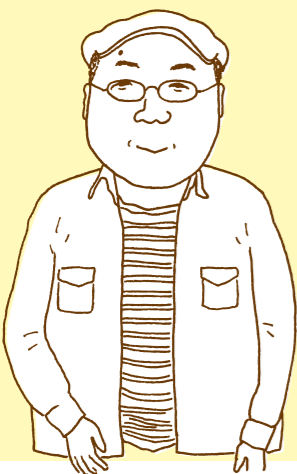
## 遅筆堂文庫があったから

南陀楼綾繁

2014年、第1回「Book! Okitama」に客として参加して以降、それまで縁のなかった置賜に毎年行くことになった。川西町の〈二楽荘〉に泊まって、トークイベントで話し、一箱古本市で本を売り、打ち上げでみんなと飲む、というのが定番の過ごし方だ。いまではすっかり知り合いも増えた。

昨年、BBOが活動を停止することを知り、ここまでよく頑張ったと称賛したい気持ちと、このままで終わるのはいらないという気持ちが交錯した。お祭りとしてのブックイベントがなくなっても、そこで生まれた人のつながりを生かしてほしいと思った。だから、主催者がフレンドリープラザに替わり、「一箱古本市in川西」が開催されることになった。嬉しかった。

ほかの町のブックイベントにない川西町ならではの特徴は、遅筆堂文庫の存在だ。イベントの内容に直接反映され



南陀楼綾繁 (なんだろー・あやしげ)

ライター・編集者。1967年、島根県出雲市生まれ。2005年から谷中・根津・千駄木で活動している「不忍ブックストリート」の代表として、各地のブックイベントに関わる。「一箱本送り隊」呼びかけ人。著書『町を歩いて本のなかへ』(原書房)、『本好き女子のお悩み相談室』(ちくま文庫)、『宛める人』(皓星社)ほか。

イラスト：金井真紀